俳諧寄集

上

蕉門秘訣俳諧宗祖

天

俳諧叙説巻之上

白雄坊編

稲

古池や蛙飛こむ水の音

道の辺の木槿も馬に喰れ

此二句を家内の奥義とす修行勤て後其意味の解きを知る事

たとへば蛙とびこむあらゝ海苔の香

やまて死ぬるしきみ花咲

あの音ハ松茸を待たるゝ

急もかくもちやの木枯尾花

四時の紀相ずく嵐さあちそひく秋霧
ゐ岩を知らく

起き〳〵衰なこそ芝めるる楢葉
先たのむ推めあるもゆゆ反本之
行秋や身さびき縫ふふのふとん
雪毎ふ汚ぢう撓む住居哉

生涯のり狀句のうへあはし陰えの
夢をうもよ歌もを
うぐれ〳〵者かる岩や蕗の花

ふとうは拔ぬ麦のく
おく〳〵れつむくりの果ゆ本者の秋
いかめしき音やあられの搖笠
蕗をおつるこしらあふ綿中の句うー
まもや重色とのよ身と梅
はる〳〵子大井京をうる身哉
白菊もさわさあ義めら秋ら義
蟬搖や流れ者のうしびき
道ふ火は四句を常ふ疲て旦雪の麦
盤とまる秋ふ八月とひあく〳〵おこ本

正風のたゝかをとゝ和歌曰俳諧いとゝ和
歌を恋するをむねとなげたる和歌
の句くまて知る
去来夜話曰俳諧ハことゝを情むの事ナ
要領とす和歌を情むとハ万事の事ハ
ひろ歌の意ゝとしむせはれハ道ハ
たるを見るもむしろ人ハ
こゝを写すもむさぶるなとしぬ
人則。推の一句こはりやそ句毎ハ感情
をめとめむるもまはゝん例のよく多あり
意して表怒哀楽ともに詠ハ十種ハ
盛唐咏嘆ハ和奇ハ全情あり俳諧

道筆ハ言ハ言ハして嘆することを先ハ
元りやはたゝん例のよく多あり
りの事をさんらるハ表のあゝ
かくめく狂言ハ狂言ハちかゝ代入て嘆
○姿情のこと
姿情のこと昔ハ論多し姿を先ハ情を
情をとしてハ和歌のこ情を先ハ姿を
にすとしてハ情むとれをこ姿情ハ
情めく姿情の論ハ俳例のよく

ねる夏するものをかなしく

野もせにしをれたる露のちるまで哉

夏くさいろなくなりやあるの所　去来

鷹ゐて人の息みるタつゆ　一笑

姿情の高尚なかさきはつ和歌

○三情のうち

枯枝のかたのとまりくらく秋の雲

林しき金情かぎりなく

秋きてあれ草きるあるなめ

道ふみわけてよみ人もふし

流うまれて蓬のもめぐる流の音

流しき金情かぎりなく

夏の夏の情の深き柳のけ

ちきしそうそうとあるる

うち死をさびしかりもよ閑古鳥

たらち女の湯屋やはらめ夏の情

中くるるをそなたとく秋のそれ

秋はまた七日の夏のはけやすき

是さいとあるる通情こ親る天書朋友の情

さふこまちの昔のたちやかよの雪のあとをたくいつれ通情ふもはしるのふ情ハ
はるよいかふとやいれハおのゑのこ情はて
ゆ人いて嘆に相ひや

嘆

○次題俳諧題の事

昔ゆ餅に書いする梅のえ　嵐雪
さくそれや硯箱ふるかしし　立志
笠の家根竹いくさもさめくれ　文章
いくたらう時ふかけめ風田のもり
是ふ題こふ題ハそのこゝろをていきか

涅槃

神垣やたもいもの涅槃像　野水
ふくめさや雲風ふうまりさのの　嵐雪
角力ふ為ぬ秋のつ綿
炉を色くる今つれふし猶の蟻

そ俳諧題ふり出ひく巡玄ふ集
を強ます〜さふてハ子句ふ前人あ
○漢詩を用ふる
馬ふ乗て秋ふ月をー室の燈
さよの中山のかこ
名月や海ふふるかまし七小町

寒食の日隣人ゑを誘つて
巡礼のうち嵯峨の釋門の華足院にゆかんすれば十夜なり

めぬ此一句は漢語をこゝろをいなる有とが
もらんはいとたいへんよ

元日　灌仏　名月　臘八

真題きく護語こゝろてやとゝ云ふ所なと

深夜　雨後　蝸牛　馬士

ふとめぐり逢句はなてもよ

○和奇の云葉をもふる

紙きぬのめるとゝもれらんるもの
蕉生の弱おもんせ一枝秀
まひしさ不見乃僧よかんよるる
すいひふや船より髪ゆゆくけ
炉冬の日を志多し野の冬蓮

和奇の云葉を蟬ふとしふいはやまこ
古哲曰云葉をそて俳諧と芽子を諧を
く俳諧とすあるぬくさよと云ふ所なと

○芭蕉ひとゝく
古言を用ゆるを
則風雅の
のちかこ句は俳諧ある時いかあ
和奇の云葉をもふ下和分の和俳諧
のゝ垂とそ二ついなり日の本の国こ

○五文字のまくら

荒海や佐渡へ横たふる天の川

芭蕉

さて文字まくらとて海なる句こゝに有り
なる文字を五たゝみ入れ
のゝ文字ハ色論ふし

千年もふる松も小雪と紫ゑ
大ふぶきの雪の降けばぼれ
此分雪の降さまをなぐさいさうてせ
んなりとよ
芭蕉の雪やあーの打たるさゝ寸　芭蕉

たゝ此句ばかりやうなどはなしとも切字
下此句ばかりは文字なかさしたれ
自用ずして字用こして自用の
こ雪を指ゝ　おもしろ

○字あまり

芭蕉暴風して鶏頭の面を吹破
牡丹散て打かさなる二三片　芭蕉
たちまち来る秋此蓮風情過ぎん
五文字一字はまりても吟するよろしゝ
風雅のこゝろ有なり
あらて海荒渡るかさうてかつゝ海さのい

きもつきはなくさを湯おとしそたとく

たゝ〳〵ぞ　　蕭庵ゝ句

朧月や　　蕭庵

吟するゝくゝ

月雫や　　かゝる蕭庵

云葉ちづまるゝ有まゝ吟しあ〜爰通さで

連奇ま三三の字あまりをすりゝく二回の

字はまりを蛙のまつ八はをと手おり〜

めたくゝ心二回の字のはまりそて吟〜あき八

くゝ〜かゝ〜ふしかつ切字ゝくゝ〜ミて

ゝ字をあまきちとしつまや水よ四

○字をはゝ〜てゝ云をふかすゝる

穏ゝいつゝ家ゝきかそ和場ゝ美

ゝ世ゝ山の吟なゝ

みゝの〜山の秋風をよみて月星

寂ゝく家ゝ

此奇ふかく感し紅い家ゝ月やとせ

ちまゝ美ゝれしゝゝやゝよるゝとゝゝゝよ

蟋蟀蕭の穴ゝてゝる松ゝゝぬ

ゝやゝぬゝ有ゝきをゝゝ云しゝ妻

細有ゝゝやゝぬゝはまて八たゝ美の

ゝ

さるはして感情深し　おもふる蟋蟀
の今いふる終りぬと暮秋の哀れ思ふ

○擣衣の事

ものしいを寒し　秋のか暮
寒さや蓼喰し　あとの妹背風
師走たし　ちくく寒の秋風　れて擣
宵を知らぬ

朱筆　莫暮捲西山雨
朱筆　作捲西　山雨
塙鋼の蓼くさも寒し　蓼の穂

声かれ〳〵精の蓼　白し　蓼の白　其の角
其の角　此侵反物　て猫の蓼　白し
海人の蓼　白し　もあれ　白　秋侍
なしんふ　ふ　る　の　の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
一句の習をなして其さ味をぬ　蓼かれ

○於もしの事

かくつもる角ぬるゝ　お須磨
あの首やいれの清水　秋　侍
中国のほくされ〳〵野　の続
九軍記お語すく〳〵古代の事を思ひ寄
又曰古人の蓼を句中のいそんとあを
平対てるやうさいせめがず

より仲の雅楽の山に秋のふー
次うちしの次のなり
紅葉は景信の白はうとしくともさき延宝
の比北白川の白はうとしくともさき延宝
元年の頃北白川の白を
ぬきすぎ春ー
○いろ白て
卯の花やくくもに折りおよこ
対月ふしは雪ふるの紙ふのとそぐ
雪のあるふしを折ふこーの事
五色ハさくて鳥は雪も黒白の

撤士
文考

色之詩も
江碧鳥逾白山青花欲然
歌も
都をハまき桜とともはあしかと
加 ちちちりしく白川の関
いろたての白はまりかりるたるいろー
自然色をそをすとし
○名所をきよる
五月雨はかくれぬるやの洲田稽
木母寺は名所を人をはうるのね
下京や雪つむうしの家の

かくのれくさゝたれはかゝはつきあをかく
もさる沢田を称し名月に名よむ色き
所を本毎寺に定め雲の人院教の母
を下京に定める皆名所をきひたること
さかも名所につかさ依ことを有かられにとくへ
花の句をあまるに吉野西洲をかく同山
月の句をあまるに姨捨名山をかく田中
いかんさ事こ

○名所を思ひ合ハ事

口切に堺の庵そちつかしさ
積る雪越る友人乾床せん

素牛

喰つミや木曽の句山乃椿ちれ　路水

其所にいたらしてハかくのるとく思ひ合す
るにはかりし東海道の一筋も志らさる
人は吉の汲下に治既芭正にもあし
たらんハ奥さめぬへし

○名所にのそミての句

菜の香や古ふ良にいふる名たち　去来

紀撰よし野ふかしや夕さくら　粛山

白露や山ほときまる汲の山
いくとゝころもてる時雨　舟泉

武さし野やいくところもてる時雨

鶴かゝや撰かゝ布し廿暦乃寒　其角

○又ある野山にて
父母のたきゝよ恵――雑多のこと

○伏見の乗舟　路通

ちんのくるまに一名かゝる冬夜部

淀田にて　湖春

永野の蜜柑ふたゝんとすの香

當麻ちに曼陀羅を物して　園女

更衣ちかく洗めん冠ふかし

角田川　貞室

いさゝか住屋　我が雛食る部屋

是名所にまつてその名所をかゝるまこと
いさゝか句こゝまゝ他の名所にまつれさ
る指　まつ――たゝらに鹿渕田川の都
鳥ちとこと知るべ――
こと知るべ――

○名所にまつてその名所にまつれさ
る指　まつ――たゝらに鹿渕田川の都
鳥ちとこと知るべ――

○名所にまつてその名所にまつ雑句の変

かちちかゝて杖突坂ヲ登る　支考

奇書よりも軍書にかゝる――吉野山

名所にまつてその名所にまつ雑の句をいろんとて

ちまんにまつる秋八句中にまつ――自然と妹

ちやうにまつる秋八句中にまつ――自然と妹

ふハにまつる――ますて雑の句せずとこゝ

秋よきを淮南子のかはにて云々
松浦より御思ひ立ち候以前年の秋乃吟)
○古事古語古詩古句をきかす
知足亭新居賀
ときさまや雀よろこぶ隣ての栗
淮南子覧冥[訓]
大廈成而燕雀相賀
はなしさや菟のゆかりの姓あすかるふ
撰集抄中務元輔の歌二首よみてと
きうよ此扇二つあかるはかなれてそ[illegible]

昔かしかりし宿も花のゆかりの深山木の
ん地して[ぞん]見る人もなかりけりて
あかしそ白く染れちらくも秋[アキ]の風
(古人の解せ返し)
[明]明詩
青莚日遠景の為に吟じ[illegible]明石の浦[illegible]見つれども秋風扱しぬく
秋風吹將暮首道行人少
愛此微陽色射我霜中衣
今宵とは只よし野の月ぞ十六里
伊賀の庵むしき庵の時伊賀より上野より
まし野[伊]十六[里]
今宵こき深く風よ身をちぎて
よしのゝ嶽の月を見る・のゝ中

白雲よ汝の去さよりかりそ　其角

古今

ちぐさ雲ねをうちかくしあれなし

かすさくそ雨ちれの夜の月

ぬしもなくにはとも　称丑把　嵐雪

清女枕草紙

五寸ちかうの印捉ふいつをこつえのさ面

ふかしふつこちとして山橋日陰山

すみちをうつ　きるかさうてはふこ

ハなしかしの雪ふ雪ふ宮ふ后ふ

やまひしこ

枕草紙

名むしの額ちんさくあるべしとそ

神ほまるあつもこ石月いくつ　素堂

一本一月二水二月

○若所ふ沼ミて古事古の奇異ハ合

仏物ふ

親ふハまきさくさのあとに

増賀聖の大悟を祝ふ合句ハ

此句の大悟を祝ふ合句ハ

ちるとて西行の涙を拭ふ増賀の信を

かちしむとそ

兼好やあふ西行ふ合歌の句

東坡詩

若採西湖比西施
淡粧濃抹雨相宜

注

而川の関越るとして
卯の花をかさしの関のたしなみ

古人冠を正すとはるを思ひ合せ

黒塚や鬼こもるとも見えずすこ　維舟

大和物語

ふちのくのあ達原の黒塚よ
鬼こもりけり宮ずまいかな

伝徳

富士まうでの二月七日八合目

且出芙蓉下夕富芙蓉下
富々説三富未出芙蓉下

此詩は伝徳の句より後なりとよりは句若き
をもひたるなるべし是伝徳のかれるなり

神祇

尊とけさこそあれ　いのめ遷宮
多代打てち霊さそんはるとすす　涼葉
而西や西もふ〳〵は沸輿　祢　風外
神と思ふ〳〵そとは椿の市軒　風和

神風のなうて白雲のくもり　除風

神祇奉納　音訓通連声の事

正風を用ひちらしぬ匂ひきよ付て

春の山やけさ　こゝぬぎすてめれて

桜ゝ青葉むすび　ゆめ　是まを嬉しこ

○釋教

観音の蓮ゝやうり川花の色

夜ゝのしら花のゝ事　春の山の事

春月まも師走の白の夜さむし

よひく涅槃の会　法の多

もつゝや先ゝ人ゝ　の　母

奉納の時ゝ句つゝき神祇ゝ　知ゝて

○恋

紅梅やゝぬ恋ぬ　ぬすれ

秋ひとゝ琴程ゝ　ゝ生て

蚊ゝを　ゝ

鈴掛　ゝ

義やゝ　ゝ

牙のほとゝ　ゝ　歌

有ゝて　ゝ　ゝ

流潤ゝ　ゝ　ゝ

代りてとまり出たり

年○旅

年暮ぬいとまつ年縫てなかく

山花艾ゆうつ人時　とちん

馬の尾に湯やちちも屋ちこ

蔭の秋しのれもやれの森

土の火のあれもつゆ秋の音

蔭の白ゆちてかひくぼ一ひき蔭

故々を思ふちもせ作ちる一去来雙の

道々泥地ふ出る

西東言さおかし　秋の　風

枝乎

ちくやれ一て新一

○贈答

己白亭にて

やとうせんあのきの枝まなるを

越後の國醫師行某かうとて

藥欄よりうれのもゆ芽まて

宗匠宗我落柿舎にて

彼も場やつさと鹿のよの通ひを

豆拾る細も木新屋も名所哉　夢良

閑人を見ぬ　化地

鶴屋久米ちかやちの撰

言水

笹の通季うて
いく筋葉それとも袖の乾き

荷兮

玄蕃堂亭にて
隠家やよもの草の中の秋

嵐雪

其角を志ゝ
本かゝしやいつこけしも君ゝ門

山川

笹をやとして二句
松をもゝ
そよぐあとはふきちれよ中の菴

土芳

人を問ふて
けかすまちちかふ宗

斜嶺

門人乙州よりとゝられて
草の戸や日くれて蕎麦人とゝられゝ

木因

服所の茶菓
あゝれぬを納代の氷魚煮て出さん

賜芸の句に親疎あるを
又貴人老人對して下の句用ゆる事

又よ　ひけ　又夕や　日かれよ
北さかゝをよくつきまく新る一
かつゝいふる獄茶まるもとも
を与獄茶まるの前の茶人

牧笛七長演あり夕べ雁
かくいふの時八正よ露よろせしく
雁ゆくもまた清はの月色まもの風
かく之時八露よりて秋之よくとゝ
賜芸の勾すくく此ん月あるを
餞別　留別　長場　追碑　祝
いつれとも同一
○餞別
船所へ送くくんを送る
物のあり〻て来る浦田の長
谷の宿之玉を送る之
箱根山をれを日を引ひろ　由之
こゝもや年のはじ仕度の茶　蚊足
友ある孤屋を送る
雲ゆくとさまてゆくもたゝこと　野坡
餞別　まとて生る友を送る
図西（カケギウシ）　卓袋
自他親疎ひさ之送る　自笑
○留別
川崎まて人こゝを別るゝ
麦の穂をちかゝ伊勢の別
旅之あるゝさ

よく生人よろこれよ宿の菊　　己風

道そ菊よ別をけうそて

いとうかうこれ郎
も義の京あ

りてうめれ郎とも義の京　　萱良

九月彩る蔭さちうる

菊の日と月見いこ夜泊人　　松風

越よりかくうて

なりまさ面めるまれう越の宮　　涼苑

自他親疎のつきまを思ひで

○吉場

嵐蘭ら身まかりうる

秋風る招れてかなしき菜の秋

其角

夜

其角の母をくしるひしる

角のもとなかさ百地すきまぶき

菊の道茶を笠る浸すや拓尾苑　　其角

那歳ふを笠る浸すや拓尾苑

同一喪中ふ

仏事も家ふうめ久くれ芙屯　　槐市

つまれれる京も十夜の夜のふ　　去来

妙宮さうあさ人きを国一西　　松風

菊のなくあうのひしるつきを知うる　　北枝

夢忘ふこもる京も夜の侵ふ

主ふるおれしころ

春雨や片へ〜ちらふるし
人の妻なるあくしをいとて　蓊浩

水無月の桐の一葉と思ふ〜
母をこそ〜おひ〜ぬ　尚白

もとよりの秋よりいろ迄るを親まて
子をこそ〜おれ〜こころ
何〜ぬのあしをおくえんをおろ
母まおくて牛〜ふを惜もし
おさなかるやひとり飯炊の蓑
涼女を夫ひて

嵯雄

雄かく〜離ワ去られて秋の暮
なあるる月ぬ迄蕣
ふるさとの雨も谷鶯や野色送り
野道や藤かくつさて秋日　去来

友なる荒ヒサ嵐世をいとも　史邦

つくるまぶのの瓜のるて暮の霧
あさ〜ての牧なを分もて
はい〜世の牧るむせるくら波ぬ
浸

桐雨

○追碑
なさ人の泥会も今や五月雨

うゑて葡萄をうれハ酒をうる
瘦汁ゝく人ゝ夏ちやさい月の事
鬢の雪(うゑ)云の時のすのこうち
毎の白回る蓑をうして
花水まうりーうくたら蓑ぶ
丈中の蓑(さく)ちやさいとも生別也
なき名まちやさいとも生別也
青面うの追碑よ
乳のうるふ世ゝ(紙)ひたる碑之
会場追碑ゝも親諫月紀のつきまつ
おとよ毎ーー

鬼貫
知足
許六
其角
玄来
尚白

懐舊

世ゝ有るまゝ宋紙のあれぶ
ゆつゝるゆ白ゝをうてとは
新古ゝ
世ゝ有るハうゝさとの秋柿の涙
ほやすくもむーれ程うゝ
宋紙のあるうゝ

世ゝ有るいさゝ時ものやうぶ
芭蕉思ひ合さ上ゝ芭蕉菴の
古きをとゝ
すれ中小鶴あゝ海やさ

曲翠

蓮の実をかくさ一ハ夢の乳房うふ　風洗
首塔や人ものほらぬ夏草しい　山店

霜月十五日情田のむ心を

菊ときも花橘のむすうの　其角

○述懐

此秋も紅葉ふるしらるる
松ふるゆ雨を八重まの秋　八橋

毎月と共ここ年寄て
見市とし年ぬ秋ふぐ老のあき
紫濃れ〳〵ても紅葉のくき世
古足袋の四十年足袋ぬ

○画賛

鼠骨の画て
稲妻や点のところ世の横
源氏の画よ
金ちい月ま形すあ〳〵ぶ　其角
車軸深小叶の画て
雲を分り車軸ひ　かく
拾女の画て
小〳〵の体たちよ〳〳居て閑の女　鬼貫
人形の画よ

月花の境あらそふ事なく　　其角

三夕の画賛

和の哥力貴族ふうの山の夕雨　　其角

秋風こゝの法師すがたの夕雨　　家国

舟あるかなたの秋の夕雨　　嵐雪

無器の画賛

青海やたゞ歌ばかりする春の雨

歌哥やうもれたる琵琶の雨　　素堂

芳しかふぬ相の一葉や篝の雨

画賛他の句なし

雨　　其角

あるとのとたゝくハかゝるしやうの雪

此句をはかりの集る東坡の賛こゝろ

せゝる月の句ゝて山ゝて賛ゝる〳〵や望重呉

天雪とゝゝる語をる鶴せ〳〵其角曲又ゝ句こ

又云あるゝゝるの賛ゝ

はのやゝゝる廿言もゝ戸ゝ雪山は

はさる雪ゝゝるものあのやゝ鶴ゝ云〳〵きやゝ

ゝ〳〵このやゝゝるゝあゝゝ賛ゝる〳〵や

〇あゝ句の鉢をゝのつ

ゝやゝのゝる句

ゝるゝ柳のゝゝる　　其角

若月や五ゝの山ゝ松のあげ　其角

をしさとあるる句

雲ぬれや名もなき山の落ち所

ちらしくと花をあはせる城おと　江蓮

ふとくくさくまつすき句

傘はおしーつけふなるあつ事

[illegible]

二　艶よやさしき句

山海まてはやふかし草の香

ひとつ葉やひとえくよ今の哀　支考

雲岸の梵てゆ樹あ寒宮うち

鈴の尾ゆ拍てたちくる年の暮　正秀

一句のおかしき

まてもあるべきあはしとかし

はるて貴うる人の長のあ

詩のあるく句

贈の夢波ゆらつく搖ゆる船底

風姓くの落所ゆのもすこ

此二句いとかし雲の北の句すてさて延

寒天和の句は正風の風はとゝもそまの句

ハ格別と知らるべし

若月や五六人よる松のあげ　真角

をしさとあり句

書かれや谷もあるさ山の蔭　白雄

ちらくと白雪ちかく撮む

ふとくくさくさまさき句　沾蓮

傘はおしつけられたる梅の事

海のあさらさらかり　玄来

一　ほそ〳〵の〳〵ふるさる句

菜のむしのはしでもあれの花の事

かゝ宿のくれのふるの雨の降り来

三　丈夫あり句　文考

書笈の梵てを拭あり宿あり事

鉢の尾拭捉てたちくる年の暮　巫考

一句のおかし

まてくてもあるべきあはしよかし

はるて前うる人の長のあ　ふ

詩　句

舟の夢波拭らつく搗水る松高風

風姓く蔦所拭のもすくて

此二句いとゝ面白の比の句すくてさて延

寒天和の句は正風の面白とも芭蕉の句

の拭別と知らるべし

一句の意を
蚊帳のいけるかひあれ　年の暮
ふとんし　秋白人のさあやすき　嵐雪
いけるのひのもゆるみ　秋白のさあやすきと
白かすして句の姿をうつと　紅葉
されこしきをうつ　女もの女とうつの
なつうて堂すると思ひ　於二　下巻に
一作方句
庵を来く　野いあやさうす
馬しつるあるもかな　野の風
化すすむ　思ひ　化ひ句のカうあるて
下巻に

自体をふれなる句
春の夜に撰ぶ　ひて　春うる
蚊帳の夢のうさをーかるなる　其角
こうとうたちぶれ句百句の格こうとうて
昆虫の句ハ深くおとひ入りて　一句　怒れ
句こよの嘗の句をこうとうすハ
心のとのる魂をいるのあるを
蚊帳ばんて自己とすて自己をこん
て蚊帳をするるなれ
又
灌仏の日を生あり　鹿のるの

出テや猫なれとく国果　徹

又

かゝ山奇の雲八花より勝まて

去来曰即句に感偶まて及句なるを
疑ひなし一度ふ句化まつる若句化る
ことふ八事こゝ花又る千其句迄の
国ゟ紅此句体人論せ一時まて八徹ゟ
のひきに有ゟ事ゟ徹ゟ
句体蝉ゟ
八和歌四一法の論ゟ於ゟ
すの上ゟ引句ゟ

徹

さゝ信やまゝ入れる鶴まて
ひゝのゝ根のもをつゝる事
け方体吟一ゟ山ゟ眠ゟ有ゟ八ゟ事ゟ

○巴文

ゟ川の水ゟ雪やまゝ
ゟのしつ波ゟゝ
ゟ

○物名

鶏鶴　言葉　鶏　卵　夜ゟ　雪略一

ゟつゟゟん時ゟ八ゟ
加茂　鳥羽紙　八月　水野　定

卜宅
冰花

菊海

暫くたゝ栗るやせ木の皮　之坊

四文字名句好ですこゝろ深く深くめ新古
人の句あれをせまるるまゝにすべく新
首おゝし古哲のせるを用るが家俳諧
なるべく古さを好るのおれ
一巻の句数二百九十九句名残をふく
なるべ巻船首の句まで其の余八船首
拘見古哲の句こ句毎ゝ思ひ
正風のさつ意を知る一

俳諧寂莫巻之上終